

ることなく容易に鳥かん図表示が得られることであろう。

立体像の臨床的意義については、とくにルーチンの平面スキャン像との比較については、もう少し検討が必要と思われる。

5. われわれの試作したシンチグラム読影装置 (SVO-1)

小山田日吉丸 折井弘武 田部井敏夫
(国立がんセンター)

われわれは日常の診療に役立ち、大変便利なシンチグラム読影装置を始作したので報告する。これはサイド・ウィンドーをもった光源ボックス、AKAI CVC-150型TVカメラ、AKAI VCS-150型カメラコントロールユニットおよびカラーTVよりなる。まずフォトシンチグラムを光源ボックスのサイド・ウィンドーにはめこみ、透過光線を介してTVカメラで画像をキャッチする。ここでは赤、青、緑の三原色の内、緑を固定しておいて赤と青の色に分けられる。そしてVCS-150に送られ、そこで赤と青のgainを読影者が適当に変えることによって好みの色調に変化させた後、カラーTVに送り込む。画像のコントラストはTVカメラのレンズの絞りとTVのpicture controlによって調整され、defocusingはレンズ系の操作で簡単に行うことが出来る。

はじめはこの装置を肝シンチグラムの中の見逃し易い欠損像を発見するために用いようとしたが、いろいろと試みているうちに、骨シンチグラムの読影に大変便利であることがわかった。即ち1/5サイズ全身像では判然としない肋骨が数えられるようになり、第何番目の肋骨への癌の転移か判読出来ることもしばしばである。同じことが脊椎についても言えるし、ぼんやりした集積増加区域も鮮明となり、検出しやすくなった。現在、日常の診療に大変役立っている。

6. シンチグラムと超音波断層の併用診断について

円尾邦信 長瀬勝也
(順天堂大・放)

超音波断層法は各分野でその診断的価値が認められ、患者に対する侵襲も少なく簡便な検査法として盛んに応用されている。

特に腫瘍性疾患に於てはシンチグラムは腫瘍の位置的診断に適しているが、腫瘍の内部構造を分析するには超音波検査が優れており、両者を併用する事により診断確率を向上させる事が出来ると考える。

今回我々は腎、肝、胆嚢、甲状腺の各疾患におけるシンチグラムと超音波検査で得られた断層像を比較し、超音波断層像の有用性について検討を行ってみた。

まずシンチグラムにより欠損像が認められた場合その部位に於て断層像を作成し、断面像の形態や内部に於ける構造の推定及び良性、悪性の鑑別等に有利な情報を得る事が出来、好成績をあげているのでその数例を供覧した。腎疾患についてはウィルムス腫瘍、嚢胞腎、腎結核を、肝、胆道疾患についてはHepatoblastoma、肝嚢胞症、先天性総胆管拡張症と、甲状腺疾患については嚢胞性甲状腺腫、結節性甲状腺腫、甲状腺癌、バセドウ病の計10例を供覧した。

7. 「かぶとがに試験 (limulus test)」と放射性医薬品の検討

村田 啓 小林正義 飯尾正宏
山田英夫 松井謙吾 千葉一夫
阿部正秀

(養育院・核医学放射線部)

Limulus testを用いて、日常核医学診断に繁用される放射性医薬品中のpyrogenの測定を試みたが、中でもpyrogenのチェックがより重要な脳槽スキャンニング用の製剤、 $^{111}\text{In-DTPA}$ と $^{169}\text{Yb-}$